第三十回
光照寺報恩講　法話

# 「濁世に立つ」

本明　義樹先生　講述
（真宗大谷派聖教編纂室主任編纂研究員、
京都教区専光寺住職）

# ２０２０年　報恩講兼光照寺創立三十周年法要　本明義樹先生「濁世に立つ」

皆様ようこそお参りくださいました。京都府の精華町という奈良県と京都の境目にあります、大変な田舎町にございます専光寺の住職をしております本明義樹と申します。昨年に引き続きまして本年も光照寺様の報恩講にお招き頂きました。昨年は住職継承奉告法要という大切な法縁、そしてまた、今年はお寺が開かれ三十周年という大変大きな節目にこうして皆様方とご一緒にお参りさせて頂けるということ、改めて尊いご縁を頂戴し心より感謝申し上げます。ご門徒お一人お一人の道場を護持せんとするお志に対しましてお慶びとお祝いを申させて頂きたいと思います。このようなご縁にあずからせて頂くような十分な学びといいますか、経験もしておりませんが、昨年よりご住職様をはじめお参り下さる皆様方の厚い志に触れ、私自身が多くのことを学ばせて頂きました。改めて今日のご縁をお迎えさせて頂けること、本当に有難いことと思っております。

今、ご住職様がお話しされました「報恩」、「恩に報いる」ということを私たちはどのように受け止めるべきかという問題は、今日私がお話しようと思っていたことでありまして、まさにご住職が話されたことに尽きておりまして、もう付け足すことなどないなあと思って聞かせて頂いておりました。つまり報恩講という一つの行事がお寺で勤まり、又ご自宅で勤まるとき、何かのためのお参りになっていないか、自分自身の仏事になっているかどうかという問題です。本当に

私自身がこの尊い仏事に出遇うことができているのだろうかということを一度立ち止まり考えたいのです。

そのことを具体的に考えるのに、少し前ですが北九州市の徳蓮寺前住職の伊藤元先生からこういう話を聞かせて頂いたことがあります。あるお寺にお参りに行くと坊守さんが、とてもうれしそうにしておられたので「何かいいことでもあったのですか」と聞いたそうです。すると、「遠く離れて大学に行っている次男が母の日にカーネーションを送ってくれたんです。そして、それと一緒にメッセージカードが入っていたんです」と。カーネーションも嬉しかったけれども、そこに添えられている手紙が嬉しかったようで、先生は「なんて書かれてあったの？」と聞くと、「お母さん、産んでくれてありがとう。これからはもっと自分を大切に生きていきます」と書いてあったそうなんです。「お母さん産んでくれてありがとう」もうれしかったけど、もっとうれしかったのは「これからは、もっと自分を大切に生きていきます」という言葉で、特に心に響いたそうです。その坊守さんは、「これまで生きてきて、こんなにうれしいことはなかった」と言われたそうです。そして、「私はこれまで亡くなった両親に対して、自分がどうすることが恩返しなのか、いろいろ考えてきたけれど、その答えが、息子からもらった手紙の中にありました。それは私自身が毎日を大事に生きていくことでした。それが私を産み育ててくれた人たちに対する本当の恩返しなのだと。どのような境遇にあろうとも、自分を大切に、一日一日を丁寧に生き

ていくことが、今の自分の課題です」とおっしゃられたそうです。

報恩講という仏事には、恩に報いるということ、恩返しということが一つの願いとしてあるわけです。そのことを考える上で非常に大切なことを教えて下さいます。宗祖をはじめご両親やご先祖、そして無数の念仏者に対してご恩を感じ、頂いたご恩に報いるということは、この私自身がもう一度自分を見つめ直し、そして頂いた命をいきいきと生きているだろうかと問い直すことにこそ報恩の原点があるのではないでしょうか。そのことを皆様と一緒に今日は確かめたいと思っています。そこで、本日は講題を「濁世に立つ」とさせて頂きました。コロナが世界中に蔓延し、人と人とがこれまでのように交わることができない不安な社会にあって、この濁りの世をどのように受け止め、どう生きるべきかを、みなさんとご一緒に宗祖のみ教えに尋ねたい思っております。

「濁世」とは大乗仏教において時代社会を言い当てる言葉としてよく目にいたします。今日お勤めしました『正信偈』の中にも「五濁悪時群生海　応信如来如実言」（『教行信証』「行巻」『真宗聖典』二〇四頁）という言葉が出ております。この五濁という言葉は「五濁」、「五濁悪世」、「濁悪世」といった表現で、『大無量寿経』をはじめとする浄土三部経にも説かれております。しかし、私たちは「五濁」と聞いても遠い過去の話であったり、インドや中国などの遠い世界の出来事のように感じてしまい、なかなか身近に感じられないのではないかと思います。しかし、

五濁の世とは、まさに現代を生きる私たちの生み出す社会そのものを言い当てるものとして、受け止めなくてはならないものなのです。

五濁悪時

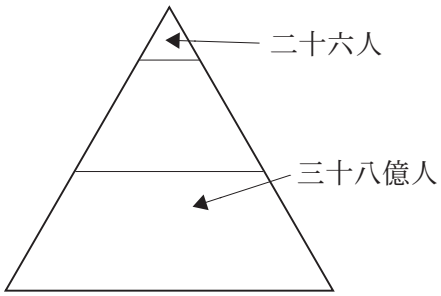
劫
見
煩悩
衆生
命
濁

五濁の世とは五つの濁りの世ということで、「劫濁」、「見濁」、「煩悩濁」、「衆生濁」、「命濁」の五つの濁りの世をいいます。

まず「劫濁」ですが、「劫」とは時間とか時代をあらわします。つまり、時代の濁りということです。このあとに続く見濁、煩悩濁、衆生濁、命濁の四つの濁りが原因となり、時代社会は濁ると考えられています。私たちの地球は、環境汚染によって自然がどんどん侵され、そのことによって異常気象が起こり、今までにない天変地異が引き起こされています。社会情勢を見てみると世界のどこかで戦争が起こり、テロが頻発している状況です。そして、今、私たちを不安に陥れているコロナウイルス感染症、エボラ出血熱などのウイルスが蔓延する社会というものも時代の濁りを象徴するものといえます。しかし、そうした社会状況の原因がどこにあるかというと、すべて私たちの欲望や煩悩が引き起こしているのです。

「煩悩濁」とは、まさに煩悩による濁りです。私たちの欲望、貪りの心は無尽蔵です。ＴＶをつけると「不正」という言葉がいつも出てきます。会社の経理の不正、自動車の検査結果の不正、

賄賂や横領など、少しでも楽して儲けようと不正をする。それが煩悩濁という社会を創り出している。とにかく私たちの欲望は尽きることがございません。二〇二〇年の一月現在、世界の資産家の上位の二十六人の総資産の合計が下から数えて三十八億人分の総資産の合計が同じだという統計がでています。世界の人口が七十七億ですから、世界総人口の半分にあたる人々の総資産合計をたった二十六人が握りしめているのです。しかももっともっとと、欲望に歯止めがききません。




飢餓や貧困に苦しむ人々を大勢生み出している社会、まさに格差社会は私たちの欲望の果てに生まれているのです。これもやはり煩悩濁という私たちの濁りが作った社会のありようそのものです。

次に「衆生濁」とは、衆生の濁りということですが、これを私は人と人との関わり、人と人の関係の濁りと考えていいと思っています。例えば一番身近な親子の関係があります。最近ニュースを見ていますと子供を虐待する、子供が親を殺める事件が後を絶ちません。そして地域社会や親族の関係はどんどん希薄になっていく。とにかく人を思いやる気持ちとか、それに対してお返しをしていこうという気持ちとか、そういったものがどんどん薄れていってしまう。気楽なのが

いいと人との関係をすべて絶っていく中で、気がつけば共に苦しみ共に喜ぶことのできる人が誰も居ないという孤独が待ち受けているのです。衆生濁という濁りを象徴するのが今、私たちが直面している無縁社会といえるのでしょう。

「命濁」とは、寿命濁ともいいまして、私たちの寿命がどんどん短くなると経典には説かれているのですが、それは言い換えてみれば私たちが命そのものを軽んじ、軽く見るありようを言い当てているのではないでしょうか。そこには生きていくことの意義が見失われ、生きていることへの実感が喪失していくことへとつながります。京都で昨年起こった事件でＡＬＳという全身の筋肉が弱っていき二十四時間介護なしでは生きていけない進行性の難病があるのですが、その難病の女性の方が主治医ではないお医者様に私を楽にして欲しいということで、薬物を投与して頂いて亡くなられた事件がありました。病気の苦しさは簡単に推し量ることはできないですけれども、私たちの命に対する考え方が少しずつ変わってきているように感じると同時に、この事件は社会全体で考えるべき重大な問題だと感じています。世界中にはオランダやスイスのように安楽死を認めている国があります。スイスは外国人の安楽死も認めています。全世界から病気から開放されたい、辛いから命を終えたいという人がスイスに殺到していると聞いております。オランダでも毎年の死者の四パーセントから五パーセントが安楽死で亡くなっているというくらい、死を選ばれる方が増えているといいます。命濁というのは自分の命そのものを受け止めきれないと

いいますか、いのちそのものを自分で見限ってしまい、場合によっては終わらせてしまうようなありようにも象徴されているのではないかと思います。

こうして考えてみますと「五濁悪時群生海」といいますと、自分とは無関係な極悪人が多くいて治安が崩壊したような極悪世界をイメージしてしまいますが、そんなことではなく、私たちが今生きている社会そのものであり、私たち自身が生み出している社会を、「五濁悪時」というのでしょう。親鸞聖人が『正信偈』で詠まれているのは、まさにそうした実感のこもった言葉なのです。その中で今日特に強調したいのは「見濁」ということです。

見濁　　思想　　濁世
　　見解

一切悪行邪見

これは思想や物の考え方の濁りを意味します。人の邪悪な思想や見解ですね。親鸞聖人はこの見濁ということについて『教行信証』に『涅槃経』の文を引用され、「一切の悪行は邪見なり」とおっしゃっています。

「一切悪行は邪見なり。一切悪行の因、無量なりといえども、もし邪見を説けばすなわちすでに摂尽しぬ。」

（『教行信証』「化身土巻」『真宗聖典』三五二頁）

すべての悪行は、邪見、つまり邪な見解に起因するのだと説かれています。「一切悪行の因、無量なり」とあります。悪行の因はたくさんあるけれども、邪見ということを説くならばそれで尽きているのだと。邪見という私たちの思想や見解の乱れが、あらゆる悪の行いの根底にあると示されています。私たちがこれだという見解をもつと、それを正義として握りしめてしまいます。すると、それぞれが正義をかかげて、互いに批判し合う。自分は正しい。自分は間違っていないと。批判された方は批判し返しますから争いが絶えません。するとお互いが許しあえない社会、まさに不寛容社会といわれるような濁りの世が時代社会を覆うことになります。

## 不寛容社会

不寛容社会という言葉は、最近、よく耳にします。数年前に「不寛容社会」というテーマでＮＨＫが特集を組まれたことがあります。例えばＳＮＳとかで何か発信する。そこに失言があると、

一斉に批判が沸き起こる。それを炎上というのですが、批判や嫌がらせの大量のアクセスに閉鎖するしかなくなる。そういう炎上の件数がここ数年すごい勢いで増えているというのです。人のミスや過ちを許せず、みんなで叩き潰そうとするのです。社会全体の寛容性が乏しくなってきている。一体どうすれば人は許し合えるのかということが番組の趣旨だったと思います。その番組を見ながら、お互いが許しあえない時代の到来を実感した出来事が思い起こされました。息子が小学校の一年生の頃、書道を習いに行くことになりました。寺の長男ですから筆を持つことも多いでしょうから、「習ってみる？」と尋ねると意外にも「習いたい」と。スポーツが好きで家にいるとゲームで遊んでばかりいるのに、やるといってくれたので少し心配でしたが習わせることにしました。習いはじめて間もない頃、一緒にお風呂に入っておりましたら、「お父さん僕すごい発見した」とうれしそうに言うのです。「どういう発見？」と聞きました。習字の最後に一番よく書けたと思う清書二枚を先生に持っていくそうです。先生が手直しをしてくださり、個別に指導をいただくのだと。ところが自分は時間がなくて、なかなか気に入った二枚が書けない。そこで色々考えて、「半紙を二枚重ねて、墨をドボドボに付けて一回書いたらなんと同じものが二枚できることを発見した」とうれしそうに言うのです。それは頼むから止めてくれとお願いいたしました。そんな話を聞かされまして、本当に大丈夫だろうかと不安に思っていたのです。それからしばらくたって不安が的中しました。ある日家に帰ると、妻がしょんぼりして「書道の先生

から電話があって、お宅のお子さんには書道は少し早いかもしれませんと、やんわりと辞めてくださいと言われた」と。どうして？と聞くと、本人に聞いて下さいということでした。その日の夜、息子と一緒にお風呂に入りまして「書道教室で何があったの？」と尋ねました。すると「僕は何もしていない」と言うんです。さらに詳しく聞いてみると、書こうとしたとき、筆先から毛が一本ぴょんと出ていたと。書こうとすると邪魔で仕方ないので取ろうとしたけど墨で手が汚れるのがいやだから、筆を振ってその毛を取り除こうと思ったらしいのです。そして一所懸命に筆を振ってしまったと。そして、ふと気がつたら周りの子の服や床が墨だらけになっていたと。それで先生がもうお宅のお子さんは来なくていいですといわれたらしいのです。まあこれだけではないと思いますがこれが一番の原因のようです。せっかくやる気になったのに残念だなあと思うと同時に、私も一年生の頃から習字教室に通っていたことが思い出されました。村の公民館の二階の大広間で習ったのですが、はじめにビニールシートを敷くのです。そこに村の子供が三、四十人もが墨を付け合ったり、こぼしたり大変でしたが、教えて頂いたんです。習いに行くときは、汚れることが前提ですから、習字の時に着ていく墨だらけの服が決められていました。今思うと、よく六年生まで続けさせてもらったなあと思うと同時に、今の世の中は本当にお互いが許し合えないんだなあと感じたんです。そしてその時に、どれだけ許し合いましょうと言ってみても許し合うことなどできないのではないかと気づいたんです。自分自身が今日までどれほど多くの迷惑

をかけて、しかも許されてきたのか、親に許され、先生に許され、友達や友達の親にも許され、見守られ育まれてきたのだという実感なしに、許し合う社会など作れないのではないかと思ったのです。たまたまＮＨＫスペシャルで不寛容社会をやったその日の深夜だったと思います。ＡＣ広告機構によるコマーシャルが流れました。それは、横断歩道を二人のサラリーマン風の人が歩いているのです。歩いている最中に双方の肩がぶつかるんです。するとそこで一瞬、にらみ合いが起こるのです。その時にご存知だと思いますが書家の相田みつをさんの詩が流れるのです。セトモノという詩です。「セトモノとセトモノが　ぶつかりっこすると　すぐこわれちゃう　どっちかやわらかければ大丈夫　やわらかいこころをもちましょう」というテロップとナレーションが流れるのです。そうすると片一方の人がペコッと頭を下げ、すぐもう一方の人もペコッと頭を下げ、それでお互いがニコッと笑って通り過ぎるというコマーシャルでした。それを見ていてなるほどなあと思う反面、なんとなく相田さんの詩が気になったので確認してみました。そうしたらテロップにあった詩がすべてではなかったのです。その後にも一行、大事な言葉が続いていたのです。どういう一文かというと「そういうわたしはいつもセトモノ」という一文です。

セトモノとセトモノが
ぶつかりっこするとすぐこわれちゃう

どっちかやわらかければだいじょうぶ
やわらかいこころをもちましょう
そういうわたしはいつもセトモノ

相田みつを

おそらく相田さんが一番いいたかったのは最後の一行だったはずだと直感しました。自分を抜きにしてどれだけ他人に柔らかい心を持ちましょうといっても、そこに自分がセトモノだったという気持ちがなかったら、そういう自分を見る眼差しがなかったら、人に優しくなどできないのではないでしょうか。そして、そういう自分であることに気づかせて頂くことこそ、本日こうして報恩講をお勤めさせて頂き、又、私たちが仏様の教えに出遇って聞法していくことの要であろうかと思います。

私たちが濁世といい、世の中が濁っているといっても結局、私たちはどこを見てそれをいっているかというと、外を見ていっているのです。濁っているのは、あいつのせいだ、社会が悪いからだと。外はよく見えるのです。外に対して批判する眼差しはいつも持っているのですが、自分を見つめる眼差しがすっぽり抜け落ちているのです。

今私たちの世の中は可視化といいまして何でも見えたほうが良い、何もかもはっきりさせたほうがいいという方向に向かっています。すると、全て数量化したり、比較して上下を決めることもできる。最近のホテルや学校などでも全部ガラス張りです。可視化することで、曖昧なものを許さない社会になってきているともいえます。ですから見えないものを見えるようにして、それでも見えないものは排除して、見えるものを把握して、そしてわかったことにして、曖昧なものは取り除くことで安心している。それで濁りは取り除けたと、外を見て私たちは感じているのですが、濁りを自分の問題として見ることができないのです。ここで大事なことは、見ている、見えているといって分かったことにしていますが、私たちの見えているもののほとんどが見えないものに支えられているということです。木の根もそうですが、見えない根によって、大きな木という見えるものは支えられている。私たちの身近なもので考えると、見えないものといえば亡くなった方々もそうです。亡くなられてしまって見えないのですが、消えてなくなったかというと、そうではない。なぜかというと、それは見える見えないではなく感じることができるからです。見えないけれども、感じることで、その人の言葉や面影を今によみがえらせることができる。そして、支えられてあったと実感することができるのです。

ところが現代社会は見えるものだけになりますから、過去のご先祖というのは見えないものですから排除しようとする。お墓やお内仏の話をしていると、自分のおじいちゃんおばあちゃんく

らいまではお参りするけど、そこから先は見たこともないので…と。確かに見えないし、実際に会ったことがないかも知れないけれども、この私の命の背景には、そうした先達の願い、ご苦労が私たちにかけられ、貫いているわけです。しかし、感じる取ることをせず、見えない知らないということで切り捨ててしまう。見える世界と見えない世界のつらなりをいただくことは仏教における極めて大切な課題といえます。そこで問題にされるのが、因果です。

## 因　果

仏教の特色の一つに因果の道理が説かれることを挙げてもよいでしょう。お釈迦様のお悟りの内容が「縁起」といわれますが、まさに因果の道理のことです。私たちの苦しみの原因は何かということを掘り下げて、結果から見えない原因をどんどん尋ねていかれた。そしてその原因を無明であると尋ね当てられたのです。ところが私たちは見えるものに固執しますから、結果にしか興味がないわけです。例えばここにご飯が出てきます。食事で関心があるのは、大概は美味しいか不味いか、見た目がいいか悪いか、高価か安価かということでしょう。すると、このお米を作った方がどれだけご苦労されたか、お母さんがどういう思いでこれを調理してくださったかという、目に見えない原因にあたる事柄は不問にされてしまうのです。そうした見えない世界に私た

ちが向き合っていけるかどうかが実はとても大事なのです。邪見という言葉は邪な見解といいましたけれども、この邪見ということは何かといいますと、この因果の関係を無視した、つまり因があっても無いようにしてしまう考え方を邪見というのでしょう。今の社会は結果主義といわれるように、結果だけを見ることに意識が注がれています。かつて次男の幼稚園での授業参観がありましたとき、家内がその様子を語ってくれました。体育の授業で、これまで一所懸命練習した逆上がりの発表があったと。順番にみんなが逆上がりをしていくわけです。出来た子は被っている赤白の帽子を白から赤にくるりとかえすらしいのです。逆上がりが出来ないといつまでも白のままです。どんどん赤の子が増えてきます。どうしても逆上がりの出来ない白の子が残るわけです。皆で応援したらしいのですがどうしても最後まで残る子がいます。その子がとても悲しそうな顔をしていたと。話を聞いていて悲しくなりました。帽子を見ると、出来たか出来ないかという結果は一目瞭然です。しかしそこからは、出来ない子がどれだけ一所懸命練習したか、鉄棒にどれだけの思いをもっていたかというようなことは全く見えないのです。幼稚園ですでに結果主義を思わせるような授業内容に何か複雑な気持ちになりました。私たちの社会がそういう成果主義一辺倒の方向に向かっているように感じられるのです。しかし、繰り返しになりますが、見えるものは、見えない多くのものに支えられてあるのです。例えば人の優しさとか人の命もそうです。全て目に見えないものです。温かい心もそうですよ。私にかけられた願いもそうです。そう

いうものを何か私たちが感じることのできる世界、聞き開いていけるような世界を、教えを通して出遇っていくことが非常に大事なのではないかと思っております。ここで少し休憩を頂いてお話を続けさせて頂きたいと思います。

## 〈休憩〉

もうしばらくお付き合い頂きたいと思います。私たちは自分自身を見つめることのないままに周りのものに対してあれはどうだ、これはどうだと批判しているというお話をさせて頂きました。ですから、私たちが見るということは見解を持つことであり、理解をすることとつながっています。理解をするということは当然分別をすることに他なりません。

見濁　　思想

見解　・・・・・・分別

このように理解や見解に使われる「解」ですが、この字の漢字の成り立ちを見てみますと、角という字と刀がありますね。刀の下には牛を書きます。つまり牛の体と角を切り離すという意味

があるんです。本来一つであった牛を、角とその胴体に切り分けるという意味があります。それが「解」です。つまり一つの物事を二つに分けて認識することを理解するというのです。分別も分けるということでしょう。分けて別けると書く。つまり一つのことを二つに分ける。つまり私とあなたに切り分ける。善と悪、天と地を分けるように、全てを二つに切り分けていくことが理解とか、見解を持つことの原意といえます。ですから見ることを通して見解を持つということは、早い話が境界線を引くということです。あらゆるものに境界線を引いて、ここまでは正しい、ここまでは間違っている、ここまでは善だけどここからは悪、ここからは年寄りでここまでは若いなど、無意識に境界線を引いていることを実は分別すると言っているのです。そしてそれが出来る人を分別のある人だというのでしょう。現代社会においてはいい意味で使われますね。しかし果たして無条件によいことといえるのかということです。

今、私の住んでいる村にはお寺が一つしかありません。ですから昔から、村のお寺という意識が強く、村の行事とお寺の行事が一緒くたになっています。自治会の議題に普通にお寺の話も出てくるわけです。今まではそれが当たり前だったのです。総代には村の区長さんも入る仕組みが出来ています。ところが最近の若い世代の自治会の役員さんがこういうことをおっしゃられるのです。「お寺さんにこういうことをいうのは何なんですが、私らはお寺のことをするのが嫌だから言うのではなくて、今後の若い者のために取り決めとして、どこまでがお寺の仕事でどこまで

が村の仕事かの境界線をはっきりしてもらえないだろうか」と。すると、総代さんは「何をいっているのか。お寺の仕事が嫌でないなら、何も境界線を引く必要ないだろう」と頑張るわけです。そんなことで最近若い人と年寄の意見が合わずに少し揉めることがあるのです。双方のおっしゃりたいことはよくわかるんです。これからの時代、政教分離ということもありますから、確かに境界を設けたいというのもわかります。しかしどうなんでしょうか、難しい問題だと思うんです。

そんなことを悶々と考えていたとき、ふと思い出したことがありました。私が小学生の頃です。よく夏休みなどの手伝いとして、庭などの掃除をするよう言われました。門を出た前の道路を掃除するように言われたときのことです。おばあさんやおじいさんから、「お寺の前の道を掃除するときは、お寺の境内の前だけをするのではなくて、必ずお寺のお隣さんの家の前もきれいにしなさい」とよく言われたものです。小学生の自分にとっては道幅もそこそこありますから、結構大変なんです。だから、なんで隣の前までしないといけないのかと不満がでるわけです。そんなある日、学校からお寺に帰って来ると、お隣のおばさんが自分の家の前だけでなく、お寺の境内の前まできれいに掃除してくれていたのをよく見かけました。それを見た時に、隣のおばちゃんもやってくれていたのか、それなら僕も一所懸命にやらなければと思ったことがありました。そうすると、お互いが相手の分までと思いますから、どこが一番綺麗になるかといったら境界のところが一番綺麗になるのです。（笑い）双方がきれいにしますから。ところが今、いいましたよ

うに、もし、境界線をはっきりさせたらどうなるかということです。うちはここまでやればいいということになると、最後に出たゴミを向こうへ追いやってしまうことも生じるわけです。自分の範囲だけをきれいにしておけば、余分な仕事も減るというようなものです。するとお互いのゴミは全部境界に溜まっていくことになるわけです。境界をなくし、曖昧にしておくことで、お互いの思いやりが重なりあう、一番心の温まる大切な場所になるはずなんですね。ところが私たちは全部境界を引こうとするのです。果たして境界を設けることが本当に私たちにとって幸せに結びつくものといえるでしょうか。そうではありませんね。国境の問題などを考えると判然としますが、境界線を引くと必ず起こるのは争いです。

### ① 争い

国と国の争いの殆どは国境がからんでいると言ってもいいくらいです。ここまでが境界というが、昔の取り決めではもっとこっちだ、いやいや違うここだと。境界の内側から自分が正しいと主張しますから、境界の外側の相手は間違いだということになってしまいます。本来はもめごとをなくすために境界を引いて明示したにもかかわらず、境界線を引くことで、結局紛争が起こることになっているのではないでしょうか。つまり、境界線を引くことで争いが生まれるというこ

とがあります。

② スキマ

それからもう一つ、境界線を引くことでスキマが出来ます。親の子供に対する虐待は社会問題として最近とくによくニュースになります。つい最近も子供を車に乗せたままお母さんがひと晩中飲み歩いて、次の日の昼まで放置していたために子供二人が熱中症で亡くなったという事件がありました。さらに最近では、お母さんが男の人に会いに遠くに旅行にいき、幼い子供を一人にして一週間も放置して、子供が亡くなってしまった事件もありました。どうしてこのような痛ましい事件が起きるのかと残念な気持ちになります。当然親が一番問題であることに間違いはないと思われますが、それと同時に学校は何をやっていたのか？児童相談所は機能していたのか？行政や地域社会は助けることが出来なかったのか？と、そういう話になりますね。すると、たいていの場合、どの組織も私たちの仕事はここまでで、ここまではしました。それ以上は、学校の仕事です、または家庭の問題ですと、皆が線を引くわけです。そうしますと結局、引かれた線と線との間にどうしても誰からの助けの手も届かないようなスキマが出来てしまうのです。そういうスキマに落ち込んでしまうと、誰からも見守られることなく、そこから抜け出すことすら出来な

くなる。それがああいう痛ましい事件に繋がっているということです。ちょっと見てあげようという近所の人なり、親戚の者なり、学校の先生なりの、皆がその境界を曖昧にすることによって、スキマをなくすことが出来るはずなのです。境界線を引くということは、私たちの責任はここまでだということを示すことでありますが、同時に境界線の外のことには一切関知致しませんという意思表示でもあるわけです。私たちはこういう境界線をどんどん張り巡らしているのです。

### ③　自分を見限る

さらに境界を設けることで、出てくる問題の一つに、自分自身を見限るということがあります。よくお爺さんやお婆さんと話をしていて「昔はよかった」「若い頃はこんなことはわけもなく出来たのに情けない」「同じ年の〇〇さんは、いろんなところに旅行されてるのに私は足が悪いからいけない」と寂しそうに話されることがあります。そこに何があるかというと、無意識ですが、過去の自分と今の自分に線を引いているのです。あの時は良かったけれど、今はあかんという線を引いている。誰々さんと自分を比較する時にはその二つの間に線を引いてあっちはいいけど自分があかんと。自分が世の中に役に立っていると感じていられる間はいいかもしれません。世間の役に立って、家族の役に立って、いろんなものに役に立って、自分が活躍している時は問題な

いんですね。線を引いても自分は役に立つ側に立っているつもりですから。でも身体が衰えて、また病気にでもなって誰かの助けを必要とするようになった時、これまでと同じように、線を引くことによって、今度は自分が役に立たない側の人間だと感じるわけです。すると自分が要らないもののように思え、結果自分で自分を責めることに繋がってくるのです。つまり、境界を引けば引くほど、人や自分を傷つけ、切り刻むことになるのです。にもかかわらず、私たちは境界を明示し、分別し、理解したいと考え、曖昧なものを排除し、分別できたものだけが正しいものであり、答えであると握りしめてしまうのです。

東本願寺に何度かお越しいただいたのですが、詩人の藤川幸之助さんからお話を聞く機会がありました。藤川さんは長い間、認知症のお母さんを支え続けられ最後見送られた方です。その認知症のお母さんを介護されたご経験から色々とお話くださいました。その中で、次のようなお話をしてくださいました。「母の認知症が随分進んでしまい、私が施設に会いに行っても誰だかわからなくなった。遠くの方をぼーっと見ていて、何を喋っても反応がない。来たよといっても喜ぶわけでもない。そのうち大半は寝ている状態で、たまに「アー」とか「ウー」と声を出すぐらい。そうすると、毎日会いにくる意味があるのかなあと思うようになった」と。そんなあるとき、ホスピスで働く看護師さんがこういうことをおっしゃったというのです。「ホスピスに末期癌の女性の方がおられ、余命も僅かとなったので、最後にこれだけはしておきたいこと、何かして欲

しいことがあれば、何でも言ってください」と看護師さんが聞かれたそうです。そうしたら、その女性は「もう何もして欲しい事はないです。ただ最後まで家族の気配を感じていたいとおっしゃった」と。側に家族がいてくれるという、最後まで夫や子供の気配を感じて命を終えたいとおっしゃったということを聞かれたそうです。そのとき、藤川さんはハッとされたそうです。自分はそれまで気配を感じるとか、側にいるだけでよいなどとは思ってみたこともなかった。母ももしかしたら、気配を感じてくれているのかもしれない。そう思い、自分もただ母親の側にいてあげようと。そしてできるだけ母を見つめていようと思われたそうです。そして、それを来る日も来る日も続けられたそうです。そうしたら自分が今まで何とも思っていなかった母の「アー」とか「ウー」という叫び声の違いに気づいたそうです。喜んでいるときの「アー」というのと、どこかが痛くて「ウー」といっている違いがあったのだと。自分は喋りかけても反応がない、聞いても答えないことで、母のすべてを否定していたのではないか。しかし、そうではなかった。自分の理解に当てはまらないだけで、こちらが心を開いて感じようとすれば、相手のいろいろなものが見えてくるのだと。理解はできなくても、感じることの出来る世界があることに気づいたとお話しくださいました。つまり、理解できるか、できないかということで線を引いてしまうと、お母さんとの間には無理解と苦しみしかありません。私たちはたいていの場合、見えるもの、理解できるもの、それは言葉であったり、数字であったり、そういう表面的なものしか見ていない。

そこには無理解と傷つけ合う苦しみしかないのです。その見えている世界の奥や背景には、感じることで初めて触れることのできる世界があるのだと藤川さんの話を聞いて思いました。そして、感じる世界、耳の底で受けとめることのできる世界こそが何よりも大事なのではないかと。

私たちは見て理解することではなく、本当は生きた声、いのちに響く生きた声を「聞く」ことを通して感じる世界を欲しているのではないでしょうか。そんな私たちに親鸞聖人は「聞思して遅慮することなかれ」とお説きくださいます。諸仏如来の呼びかけ、生きた声をただ聞きなさいとおっしゃるのです。そして親鸞聖人が同じ「総序」で「聞きがたくしてすでに聞くことを得たり」とおっしゃるのは、聞き得た慶びと感動が語られています。それは区別とか、分別とか、境界線によって引き裂かれる世界を超えた、命の温もりのある世界に触れることのできた慶びの言葉なのです。

誠なるかなや、摂取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ。ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈、遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知りぬ。ここをもって、聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。

（『教行信証』「総序」『真宗聖典』一五〇頁）

そしてその生きた言葉の一つに、親鸞聖人が晩年語られた『歎異抄』のお言葉で申しますと、「弥陀の本願は老少善悪のひとをえらばれず」と語られるものがあります。

弥陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず。ただ信心を要とすとしるべし。

（『歎異抄』一章『真宗聖典』六二六頁）

如来の本願においては、老少善悪という、老いや若きも、そして善や悪も、そうしたところに一切の境界を引かないと誓われてあるのだと。ここでえらばれずと言われているのは「簡ばれず」という字を書きます。私たちは一般に「選」という字をイメージいたします。

老少善悪のひとをえらばれず

簡ばれず

選

簡

こちらの「選」は、選び取ることを表します。選挙などで一人選び取るように、沢山あるうちの一つを選び取ることを意味します。ところが「簡」は、選び捨てる方なのです。「きらう」とも読みます。つまり、一つを残して、あとのものを捨てるときにこの「簡」を使うのです。ですから、ここで「えらばず」とあるのは、老いであっても若くても、きらわず、区別せず、捨てないという意味なのです。私たちの現代社会というものは、人の存在価値があらゆる基準で測られ、線をひかれる世界を生きています。何歳以上ですか、試験で何点取りましたか、資格は取得していますか、男ですか女ですかと、絶えず分けられ、はじかれ、疎まれる「簡」の世界を生きてきているのです。そんな私たちに、分別の世界を超えた簡びのない世界を生きよ、あなたはあなたでいいのだと、いのちの奥深くに響く生きた呼びかけが「老少善悪をえらばれず」という言葉なのです。分かるか分からないか、勝ったか負けたか、善か悪かという境界線に翻弄されるいのちで終わっていいのか。あらゆる命がそのままでかけがえのない尊い命として生きることのできる世界、分別を超えた、曖昧でありつつ、人の温もり、願いを感じていける世界を浄土なるものとして、明らかにしてくださったのが親鸞聖人の浄土真宗の教えなのでしょう。

「濁世」を生きる我々に、宗祖は「己が能」を「思量」せよと繰り返し語られます。私たちは、他人を思量し、社会を思量し、あらゆるものを量っている。しかし、「濁世」という濁りの中で、

私たちがなさなければならないのは、「曖昧に生き」「曖昧な社会」を作っている自己自身を「思量」することのはずです。濁世とは、私たち一人一人がこの濁りを作っていたという実感のこもった言葉なのです。ですから曇鸞大師、道綽禅師、そして善導、法然、親鸞と全ての方が濁世とおっしゃる背景には、濁世を生み出してきたのは他でもないこの私自身だったというという慚愧と悲しみの心が貫いているのです。

であるならば「濁世」を「濁世」と信知できるのは、そこに光が届き、教えに触れていることがあるからなのでしょう。自分を支える無数のいのち、無数の願いに無頓着で、そのことが見えておらず、自我分別よって、切り捨てられ、顧みられることのない状態であることに、光に出遇うことで自覚された言葉が「濁世」であり、「五濁」という言葉だといえるのです。

先日あるドキュメンタリーの番組を子供と一緒に見ていました。アマゾン流域の非常に濁った川に生息する巨大魚を特集にしたものでした。魚を探すため、船に乗って川の沖にでて、そこで水中カメラマンが川の中に潜られました。濁りがひどく、川の中では一メートルか二メートルくらい先しか見えない状態でした。船の上から、もう少し下の方を捜索するように促したときです。カメラマンがさらに深く潜られたとたん、画面が真っ暗になったのです。つまり、それ以上潜ると光が届かないのでした。それを見てなるほどなあと思ったのです。つまり濁っていることがわかるのは、光が届いているからだということです。光が届かないと真っ暗なのです。光に照らさ

れるとは、濁りが消えて、スッキリ前が見えて、どこまでも自分の足で進んでいけるようなことをいうのではないのでしょう。光に照らされることで、自分が如何に深い濁りの中にあり、その深い濁りを生み出していたのかということに気づくと同時に、自分の足で前に進むことを断念し立ち尽くすことを意味します。しかしだからこそ、阿弥陀さまの「浄土に生まれようと願え」という招喚の呼びかけと、お釈迦様の「浄土に往け」という発遣の呼びかけを、ただ聞くところに確かな一歩が踏み出されるのではないでしょうか。

本日は光照寺様の報恩講であり、三十周年の記念のご法要でございました。私たちが恩に報いるということは私にかけられてある願いに改めて真向かいになり、この身の事実に出遇わせて頂くことから始まります。それは終わることのない歩みであり、常にはじめの一歩を踏み出すものであると言えます。これから益々、皆様方の聞法の歩みが続きますことを念じまして、本日のお話とさせて頂きたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

## 〈感想〉

淡海）ありがとうございました。今お話を聞いておりましたら一つ思い出したことがございました。先代のご住職様が境界ということを「あわい」という言葉「あいま」という言葉、和語になりますか、そんな言葉で話されていましたことを思い出しておりました。「あわい」ということが私たちにはどうしても分別を超えたという世界が見えない。ある意味で能のような時の間合いとか、言葉の影に隠れている所作そういったものを一つの見る目としたらどうかという話を伺いました。書物もご紹介いただいて読んだのですが、だいぶ前のことで思い出せないのですが、そのことを思い出させて頂きました。境界という問題は、空間的なものと時間的なものがあると私は見ております。例えば何か発言した時に、即答えると揉め事が起きたりします。けれどもちょっと間合いをおきますと、自分自身が見えてきて、そこに時間をとるということの重要性を抱えているのが今、社会生活を送っているところでよくあることかと改めてもう一度気づかせて頂きました。今日は本当にありがとうございました。

住職）先生ありがとうございました。五濁ということから見濁と頂いて、濁世に立つとはという

ことで、私たち一人一人が本当に濁りの世界を生きていることを深く照らされる歩みといますか、そこに開けていくことが先生のお話を聞いて頷かせて頂いたことでございます。世の中コロナも合わせてそうですけれど、いろんなことが疲弊して、真っ暗な世の中だなあと思うことが多々ありますが、その中にあって、ここに蓮の写真がありますが、これは上野公園の蓮を門徒さんが寄贈して頂いたのですが、蓮が泥田の中にあって、綺麗な花を咲かせる。仏教の象徴の蓮であると。『阿弥陀経』でしたら、赤や青や黄色や白それぞれに輝いていける世界があるのだと。私たちは泥田の中にあって染まらず、それぞれ一人一人が命を尊い命だと歩ませて頂く。そこに阿弥陀様に照らされる視点、光と先生はおっしゃって頂いたように、そこに一筋の光が指すというところに明るみがあると思わせて頂きました。電気があると明るくて、なかなか真っ暗だと感じられなく夜も明るくなっていますが、真っ暗で疲弊している世の中にあって私たち一人一人が何か鬱憤を抱えている中で、人間の煩悩があぶり出されて、いろいろなものが出てきて、それがまた人間の正体、罪業性、罪深いものだと教えて頂きながら、それは他のことではなく、私の中に本当にそういうものを持っていると思うわけです。縁次第でどうなっていくかわからないということを思わされます。本当に今年一年こういう一年があるのかという中で、今日、十月十一日を迎えているわけですけれど、この大変な中を生き生きと命ある限り大事に一日、一生歩ん

でいこうということを、今日の報恩講で確認をさせて頂いて、日々、力強く歩んで行こうという思いが、今日、皆さんと共有できたのではないかと思います。

先生、今日は遠いところからご出講頂きましてもっとお聞きしたい気持ちですが、時間の中で大切なことをお説き頂きました。又、これからもお導き頂きたいと思っております。ありがとうございました。

## 〈住職挨拶　光照寺住職　池田孝三郎〉

本日はお忙しいなか、また、台風のあと、コロナ騒動において、報恩講兼光照寺創立三十周年法要に多くの皆様のご参詣を頂き心より感謝申し上げます。

昨年は報恩講にて、住職継承奉告法要をさせて頂き、本日は報恩講にて、光照寺創立三十周年の法要をさせて頂くという、二年続けて尊い法要を勤修させて頂き、身が引き締まる思いです。

毎年思うことは報恩講を勤めると他の法要に無い、独特な緊張感があり、法要が終わると全身の力が抜けるようになります。それは、何かというと報恩という言葉の重みにあります。恩に報いきれていない、本願の恵み、教えの恵みに対して、一年間、頂ききれていない、だから、報ずることもできていない、という、よくいえば、自責の念があるともいえますが、そういうのもはからいです。ほとけさんのまなこは私を見通して、本願の教えに逆らって、あなたはいつも自我分別を頼りとして生きているのではないですか、と、問いかけてきます。年中行事の一つとして勤めているだけではないですか、と。その問いかけを頂くことがこの一年に一回、報恩講を勤めるとても大切な意義ではないかと最近、少しづつ頷かさせて頂いていることです。

さきほどの表白にも申しましたが、平成二年十月の報恩講から数えて、今年で三十年という節目を迎えました。『聞法道場　愚庵』の落慶をして以来、聞法の道場として歩み、その後、光照

寺と名付け今日にいたります。詳しくは受付でお渡ししました年表をご覧ください。とにかく聞法を大切にしたお寺だと受け止めて頂ければ有難いです。それが開基の願いでもありました。聞法をとおして、多くの先生や法友と出遇わせて頂いたことはかけがえのない尊い仏縁であります。先生や法友の導き、同朋交流がこの遇い難きみ教え、真宗のみ教えに、より一層深く親しむことができると確信するものであります。

「これからが　これまでを　決める」（藤代聡麿）という言葉がありますが、三十年経った今、いよいよ、光照寺が親鸞聖人のみ教え、本願念仏のみ教えを聞き開く聞法道場として、過去、未来、現在の三世を包む無量寿なる「今」、この瞬間の「とき」をかけがえのない出来事であるということを抱きながら御同朋御同行として歩んでいきたいと思います。

浅学非才でございますが、皆様からお育てを頂きながら、「仏法弘まれかし、念仏よ興れ」という、光照寺の旗印を大切に継承し、仏法弘通、念仏興隆、私にできることに尽力して参りますので、これからも末永く宜しくお願い申し上げます。

本明先生にはお忙しいなか、遠方よりご出講ありがとうございます。このあと、ご法話を頂戴しまして、遥かなる真宗のみ教えを味わい、光照寺と私自身の歩みを確かめさせて頂き、報恩のこころを、聴聞させて頂きたいと思います。宜しくお願い致します。

## 〈総代兼護持会会長　挨拶　平山正三〉

本日は、コロナ禍の中にも関わらず、報恩講兼光照寺創立三十周年法要に多くの方々にご参拝頂きありがとうございます。

皆様、ご存知のとおり、報恩講は宗祖親鸞聖人のご恩徳に報いる仏恩報謝の仏事として勤める、真宗門徒にとって最も大切な法要であります。心を込めて感謝を申し上げ、お勤めをしましょう。

そして、今日は、もう一つ、法要が執り行われます。それは、「光照寺創立三十周年法要」であります。

今日、受付にてお渡しした袋に「光照寺創立三十周年の歩み」という冊子が入っておりますので見ていただくと分かりますが、「光照寺」の寺号は一九九三年平成五年に教区より許可されましたが、前住職が「真宗は聞法第一」との信念を持たれ、その三年前一九九〇年平成二年十月、この本堂の裏にあります建物、「聞法道場『愚庵』」を建立され聞法道場を開かれたことを起源として、今年が三十年となりますので、本日の「光照寺創立三十周年法要」となった訳であります。

今後、四十・五十・百周年と歴史を積み重ねて行けますよう、孫末代までのご縁を頂きたいと切にお願いいたします。

なお、勤行の後、昨年に引き続きご遠方より出講頂いた、本明先生のご法話を頂戴したいと思います。最後までお付き合いのほどよろしくお願いいたします。

# あとがき

本書は二〇二〇年十月十一日、第三十回報恩講における本明義樹先生（真宗大谷派聖教編纂室主任編纂研究員・京都教区専光寺住職）のご法話の記録です。

先生はご自坊のお寺を守りながら、本山の聖教編纂室主任編纂研究員という、聖教を現代に伝えていく為に、聖教の総点検、そして、改版出版していく骨の折れるお仕事に携わっておられます。私たちが聖教に触れさせて頂くということは先生のようなお仕事をされているご努力があってこそ聖教を手にすることができるということに思いを馳せると、読むときの姿勢が正されます。

当報恩講は光照寺創立三十周法要と兼ねて勤修致しました。振り返りますと、長いようであっという間の三十年を経過しました。これまでの歩みを年表にしてご縁の皆様に配布しました。多くの先生、法友にお育てを頂いたことが私にとって、お寺にとっても大きな宝となっていることに改めて実感致しました。先生には「濁世に立つ」という講題で、「実は私のことが一番分かっていなかったという感動の言葉が濁世ということなのです。そこに立つということが実は阿弥陀様の光を受けて本当の御法の世の中を一歩一歩その教えの言葉に促されて歩んでいくことが出来るという、そういう一つの願いがこの濁世に立つということに込められていることです。」とお話しを頂きました。自分のことそして自分を支えている多くの目に見えない支えというものをな

いがしろにしている自分に気づくことの大切さを教えて頂きました。

大変な状況の中をいきいきと命ある限り大事に一日、一生歩んでいこうということ、又、日々力強く歩んで行こうという思いを皆さんと共有した節目の報恩講を勤めることができました。これからも末永く宜しくお願い申し上げます。

先生にはお忙しい中、原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

又、平山（総代兼護持会会長）様には、ご挨拶の原稿を校正頂きまして誠にありがとうございました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様に感謝申し上げます。

合掌

二〇二一年十月二十三日

第三十一回報恩講

光照寺　住職　池　田　孝　三　郎

第三十回　光照寺報恩講　法話
「濁世に立つ」

本明　義樹先生　講述

2021年（令和３年）10月23日
発　行　真宗大谷派　弘興山　光照寺
事務局　〒331-0821
埼玉県さいたま市北区別所町102－２
電　話　048－651－2781